

訳注『研志堂詩鈔』選(一)

塩見邦彦

(鳥取大学名誉教授・島根大学元教授)

摘要

正牆適處は鳥取城下で文政二年(一八一八)に生をうけ、明治八年(一八七五)に亡くなった武士である。と同時に漢詩人として活躍した人物であり、この時代において傑出した詩人でもある。ここに数回にわたって、彼の詩集、『研志堂詩鈔』の選訳及び注釈を試みる。「はじめに」では、彼の詩の特色、『研志堂詩鈔』の版本について述べる。彼は詩人の心と画人の心とをもって、自然を見たのであって、結果としてそれが漢詩という世界に結実した。そのために、唐詩・宋詩の作風に学んだことを、実証的に説明する。

キーワード…正牆適處 研志堂詩鈔 幕末 明治 鳥取 漢詩

はじめに

一、正牆適處と『研志堂詩鈔』について

正牆適處は鳥取城下で文政二年(一八一八)に生をうけ、明治八年(一八七五)に亡くなった武士である。と同時に漢詩人として活躍し

た人物であり、この時代において傑出した詩人でもある。ご存じのよう、この時代は黒船の来航により、国内外で騒然としていた時代であるが、それは因幡(鳥取)藩のような、いわば比較的中央から離れた藩においても例外ではなかった。そのような時代の子として、適處も藩政から逃れることは出来なかった。否、むしろ己の使命として攘夷派の人物としての一面も併せ持っているのである。しかし、彼の漢詩を見る限り、そのような主張は殆どと言ってよい程影を潜め、自然を楽しむ、自然の中に没入している彼を見出すことは極めて容易であ

る。

彼の漢詩は、現在『研志堂詩鈔』(上・下)二冊の中に見ることができる。上巻は一三六首、下巻は一一六首で、計二五二首である。その中には、後に詳しく見るように、同じ題で何首かを詠んだものもあれば、スタイルも五言絶句(五絶)・五言律詩(五律)・七言絶句(七絶)・七言律詩(七律)のように極めてオーソドックスな定型のものもあれば、中には雑言詩や楽府(がふ)の様なものまであって、一様ではない。又、詠われる題材も自然は勿論のこと、友人との送別詩、歴史を詠んだ詠史詩、何気ない農村風景など多岐にわたる。しかし、彼が才能を発揮するのは、自然を詠んだ詩であって詠史詩や楽府のようなものではない。

誤解を恐れずにいえば、恐らく彼は詩人であると同時に、画人でもあった。それ故現在でも我々は彼が描いた山水画(文人画)を博物館等で見るができる。つまり、彼は詩人の心と画人の心とをもって、自然を見たのであって、結果としてそれが「漢詩」という世界に結実したのではなからうか。次の詩などはその一例として見てもよいのではないかと思う。

坡稻秋初熟　　坡稻　　秋に初めて熟し
 黄雲未上鎌　　黄雲　　未だ鎌に上らず
 鼓聲村社晚　　鼓声　　村社の晩れ
 落日照青帘　　落日　　青帘を照らす

(適處『研志堂詩鈔』卷上「秋郊所見」)

秋の郊外の農村風景について見たままを詠っているが、何と云うのどやかな風景であろうか。この詩では、先ず稲穂の黄色と酒屋の青いのぼり旗が視覚に訴え、どこからともなく聞こえて来る神社のお祭りの太鼓の音が聴覚を刺激する。この視覚と聴覚は、たとえそれが個人の感覚であったとしても、詩を詠む側には、それが共通の感覚として認識され、想像される。これは他ならぬ絵画世界の認識でもあり、刺激でもある。この適處の見た風景は因幡地方の一風景であると同時に、当時の多くの人々が見た一般的な風景でもある。その風景は各個人の中で醸成され、一幅の絵画を見るように読まれたに違いない。鮮やかに切り取られた風景画ともいえよう。江戸後期の人々はこのような自然の中に生きていたのであり、それが当たり前前の風景であった。それは中国では宋代の楊万里(一一二七—一一〇六)や陸游(一一二五—一一二〇)といった詩人たちが作り上げた詩の世界と共通する精神でもある。

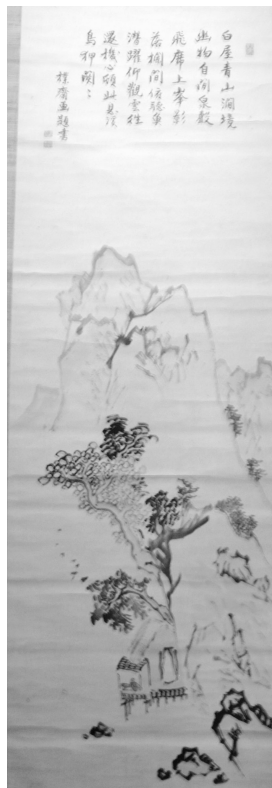
画人にとって自然は、それがいかに忠実に自然を描いたものであつたとしても、それはあくまでも「胸中の宇宙」であり「胸中の自然」であろう。そのような自然を見る視覚と感覚を磨き、適處はごく自然に作詩においても、絵画においても、彼自身の世界として定着させたのである。漢詩は当然、彼の刻苦勉強によるところが大きい、恐らく大阪では篠崎小竹や藤沢東咳、江戸では昌平齋での佐藤一斎門下での作詩が、後の彼の詩に影響していることであろうことは想像に難くない。しかし絵画の方は一体誰から学んだのであろうか。考えられるのは彼の祖父の墓碑を書いた建部樸斎(一七六九—一八三八)の存在である。樸斎は「赤山水」と呼ばれる「赤鉄鉞」の顔料である代赭を

薄く施し、それに藍色を添えた山水を描いたが、当時としては極めて特異な山水画である。この「赤山水」と呼ばれる絵画(南画)は彼の前にも、又それ以後も全くと言って良いほど誰も描いていない。ただ似たような絵画表現は浦上玉堂(一七四五—一八二〇)の絵の一部に淡紅・淡青を使用した絵画があるのみである。しかし、玉堂の絵画にあつてはごく一部分の絵画にかぎられる。しかも玉堂の絵画では墨色の輪郭の上に淡紅や淡青を使用していて、樸斎のように赤や青の色を直接使用して山を描く手法ではない。樸斎の現存するすべての絵画のように、赤や青の色彩を使用した絵画はこの時代にあつて何人も描いてはいない。一見、特異な彩色画であるが、よく見ると誠によくできた絵画であつて、どこにも破綻は認められない。樸斎はその様な清雅な南画を多く描いたが、それは現在でも見ることが出来る(図一、建部樸斎筆「白屋青山圖」軸参照)。

樸斎は通称東五郎。諱は嘉、字は遯夫。名は憲。改めて稗。号は樸斎。他にも黙斎、餐霞、敦今、糞叟、狄肉散人、黙庵等がある。元禄十六年(一七〇三)曾祖父・七太夫の代からの西館藩池田家に仕える武士であり、その樸斎が仕えたのが文人大名として有名な池田冠山(一七六七—一八三三)であつた。つまり、因幡における、冠山—樸斎—適處と流れる文人的な要素は、適處の才能と努力によつて新しい時代にふさわしい開花を遂げたといつてよいであろう。結論的に言えば、適處の詩は絵画と詩的なセンスの融合の上に成り立っているのである。漢詩では、いかに文字に写し取るかが問題で、同じ「みどり」を言うのに「翠」なのか「緑」なのか、また「碧」なのかは作者に任されているし、まして漢詩の場合は、平仄や韻字、対句などによつてかなりの制約もある。そのように考えると、適處が得意とした詩の

タイトルは何なのか、そこに彼は何を、どのように表現しようとしたのか。これらの事をこの『研志堂詩鈔』で見たいこうとおもう。

図一、建部樸斎筆「白屋青山圖」軸(著者蔵)



二、『研志堂詩鈔』の版本について

『研志堂詩鈔』の最初の出版は文久元年(一八六一)の事である。しかし、それ以後も版を重ね、現在知られている版本は以下の通りである。

- 一、『研志堂詩鈔』(上巻・下巻)文久元年辛酉(一八六一)新鐫 書林 油屋仲藏他三軒
- 二、『研志堂詩鈔』(上巻・下巻)明治三年(一八九九)倉吉、徳岡書店刊
- 三、『研志堂詩鈔』(上巻・下巻)大正八年(一九一九)鳥取、佐伯元吉編集・発行

四、『研志堂詩鈔』(上巻・下巻)自筆写本(鳥取・痴漢居士の署名あり。この写本は鳥取県立図書館が所蔵しているが、写された紀年については不明)

三、適處詩の特徴

彼の漢詩の特徴は那邊に有るのであるか。

例えば藤森弘庵は『研志堂詩鈔』に寄せた「序文」で「譬えば璞を失ないし者のごとく、初め之を求めても得られず」と最大級の賛辞を述べているが、彼の詩の特徴については一般論としか言いようのない「才思敏膽、・・華氣迭宕」とだけ言っている。つまり「才能や考え方は敏捷でありながら聡明でもあり、華やかな雰囲気が行き来する」とのみ言っているのである。強いて言うならば、巻下の最後に載せた湖山楼主人(小野湖山)が「体は古今を兼ね、調は唐宋を雑え、意は高く氣は爽、字は鍛えられ句は鍊せらる」と述べているのが、彼の詩の特徴をある程度捕えていると云えようか。

彼の詩が多くの人々の賛同を持って迎えられたのには必ず理由があるはずである。「湖山楼主人」が云う「唐宋を雑え」という言葉は、そのヒントの一つであろう。即ち、彼の詩には「唐詩」や「宋詩」のような特徴が備わっている、ということである。以下にその典型的ともいえる詩の例をいくつか見てみよう。

月落窗無影 月落ち 窓に影なく
有風送香來 風有りて 香を送り来る

數點鄰牆雪 数点 鄰牆の雪
分明知是梅 分明に知る是れ梅なるを
(適處『研志堂詩鈔』卷下 「夜梅」)

月が落ち、あたりは窓に影さえも映らない闇であるが、風は良い香りを私の所まで送ってくる。隣の家の垣根越しに数えるほどの白い雪が見えるが、私にはそれがはつきりと梅の花であると判っているのだ。詩はこのような意味であるが、これは明らかに中国は宋代の詩の巨人の一人、王安石(一〇二一—一〇八六)の次の詩を下敷きにしたものである。

牆角數枝梅 牆角 数枝の梅
凌寒獨自開 寒を凌ぎて 独自に開く
遙知不是雪 遙かに知る 是れ雪ならざるを
爲有暗香來 暗香の来たることあるが為なり

(王安石「梅花」詩、『全宋詩』卷五六三 王安石二六)

垣根の角に数本の梅の枝、梅はこの寒さを乗り切つてひとり咲いてくれたのだ。遠くから雪ではないことが判るのは、暗闇の中でも梅の香りが漂っていることによるのだ、と詠うこの詩は、先に挙げた適處の詩が、この王安石の「梅花」詩を下敷きとしていることは先ず間違いのないところである。見方によっては剽窃ともとれるものであるが、適處の意識としては、恐らく王安石の詩をアレンジした位の意識であつたろうと思われる。否、むしろ江戸時代の詩人の意識は中国の詩をどれだけ上手に真似をして本詩に近付けるかという事の方がより

重要であったのだ。彼は、その点で中国の詩を自家葉籠中のものにしてきた、と見たほうがより正確であろう。しかも適處の詩も王安石の詩も「五言絶句」であること。韻（上平灰）字も「來・梅」（適處）、「梅・開・來」（王安石）とほとんど一致し、「影」が上声で異なる位である。この様にみると、適處がいかに宋詩を学んで自分のものにしていったかが判るであろう。

では、唐詩の方はどうであろうか。彼が唐詩を学んでいたことを示す良い例が、以下の詩である。

行盡寒山石徑中　　行き尽す　寒山　石徑の中
停車亦愛晚楓紅　　車を停めて　亦た愛す　晚楓の紅
朝朝深看經霜艷　　朝朝　深く看れば　霜を経て艷なり
何似春花不耐風　　何んぞ似ん　春花は風に耐えずと
（適處『研志堂詩鈔』卷上「賦得霜葉紅於二月花」）

この詩は、その題からも判明するように、唐代・杜牧の有名な「遠く寒山に上れば石徑斜めなり」（「山行」という句で始まる詩であるが、それを適處は、杜牧が第三句目で「停車坐愛楓林晚（車を停めて坐るに愛す楓林の晩）」と詠ったのに少し手を加え、二句目で「車を停めて亦た愛す晚楓の紅」と詠う様は、恰も換骨脱体、春の花々との比較でつややかな秋の楓を点描するのである。尤も、その詩題で杜牧の「山行」詩であることは断っていて、その下敷きがあつての詩ですよ、と言っているのではあるが……。

同様の手法は次の詩にも見られるものである。

清明時節雨紛紛　　清明の時節　雨紛紛
已別梅花又別君　　已に梅花に別れ　又君に別る
頼有寒厨幾杯酒　　頼むは寒厨に幾杯かの酒有り
半宵離恨付微醺　　半宵の離恨　微醺に付す
（適處『研志堂詩鈔』卷下「送僧祖能」）

最初の句は、前詩と同じ杜牧の詩「清明」詩の一句目と同じ句である。この同句を最初に持つてくることで、適處はこの詩を詠む者に杜牧の「清明」詩を思い出させ、そこから二句以降の適處の詩の世界へと導くのである。この詩も、前詩と同様に唐詩人の詩の句を下敷きとしながら、自分の詩の世界を展開する、いわば日本の和歌の世界での「本歌取り」の手法を漢詩の世界に応用したものと見ることも可能であろう。

次の詩はどうであろうか。

四面寒山各闢奇　　四面の寒山　各おの奇を闢かわせ
滿天風雪引詩思　　滿天の風雪　詩思を引く
傲然爐畔抱衾臥　　傲然たり　爐畔に衾を抱いて臥すも
未必灞橋鱸背時　　未だ必ずしも灞橋鱸背の時にあらず
（適處『研志堂詩鈔』卷下「溪山臥雪圖」）

周りの山々は雪を戴き寒々としているが、空一杯の風や雪が詩興を

かき立てる。傲然と囲炉裏の傍で布団を抱いて眠るが、必ずしもあの鄭棨が云ったように、灞橋や驢上ばかりが詩思を起させるとは限らないのだ、と詠うこの詩は、『全唐詩話』に載る唐代末期の鄭棨(？―?)の逸話に依りながら、みごとにそれを反転させ、必ずしも灞橋や驢上だけが詩を作る条件ではないと言い切るあたり、まさに適處の面目躍如たるものがある。この「灞橋驢背」は、もと「灞橋驢上」として有名な故事で、鄭棨がある人に「近頃新詩を作ったかね」と聞かれて「詩思は灞橋風雪中、驢子の背上にあり。今の如く俗事に携わって決して詩興も起らぬ」と答えたという故事に依っている。これらの事から、以上の事は恐らく適處の実感であったろうと思われる。なぜなら、彼はその時々、場所場所で詩興が起ればそれをそのまま漢詩にしているからである。

更に適處の詩の特色を言うならば、彼の詩には色彩と聴覚に訴える文字や句が多く詠われることである。例えば、

一片猶看心膽赤 一片 猶お看る 心膽の赤きを
石榴花底坐黄昏 石榴の花底 黄昏に坐するを

(適處『研志堂詩鈔』卷下 「宮原海宇招飲、壁掛良齋翁詩軸、次韻賦似」)

この句では心膽の「赤」、石榴の花の「赤」、黄昏の「黄」の文字と、赤や黄色を連想する色彩に富む句作りとなっている。そして、この様な句は彼の詩の中で多く見られる現象なのである。

一葉扁舟破碧波 一葉の偏舟 碧波を破り
直攀鼈背蹈丹霞 直に鼈背に攀じりて丹霞を踏まん

(適處『研志堂詩鈔』卷下 「巖島」)

この句では碧波の「碧」、丹霞の「丹」のように碧と丹(赤)が対を成して詠われている。

勿論、このような句作りは漢詩では対句という技法でよく使用されるし、特に律詩では三・四句と五・六句は対句でなければならぬという約束事も有って、多くの場合、その約束で前句で色に関する文字を用いると、後句でも色に関する文字を使用するのが常である。

次にあげる白居易の「王十八の山に帰るを送り、仙遊寺に寄題す」という詩では、三・四句、五・六句で見事な色彩語の対句がつくられている。

曾於太白峰前住 曾て太白峰前に於いて住まい
數到仙遊寺裏來 數しば仙遊寺裏に到りて来る

黒水澄時潭底出 黒水 澄める時は 潭底出で
白雲破處洞門開 白雲 破るる処に 洞門開く

林間煖酒燒紅葉 林間に酒を煖めて 紅葉を焼き
石上題詩掃緑苔 石上に詩を題して 緑苔を掃(はら)う

惆悵舊遊無復到 惆悵す 旧遊復た到ること無きを
菊花時節羨君迴 菊花の時節 君が廻るを羨む

(『白居易集箋校』卷第十四、律詩、朱金城箋校、上海古籍出版社)

右の詩はかなり有名であるので、ご存じの方も多であろう。特に五句目の「林間に酒を煖めて紅葉を焼く」は、古来日本で人口に膾炙して来た句である。しかし、今ここで注目してほしいのは三・四句目と五・六句目の対句である。三・四句目の「黒水」と「白雲」、「澄時」と「破處」、「潭底」と「洞門」、「出」と「開」。五・六句目の「林間」と「石上」、「煖酒」と「題詩」、「焼」と「掃」、「紅葉」と「緑苔」。これらは色彩に富む語彙もさることながらすべての語彙が対を為している事である。これらの詩句を見ると、三・四句と五・六句が対句でなければならぬということと同時に「黒」や「白」、「紅」や「緑」という色彩語が対句を作るのに文句なしの語彙であることが判るであろう。

ここで翻って適處の詩について言うと、「宮原海宇」の詩は絶句(四句)であるし、「巖島」の詩は律詩であるが、先ほど引用した二句は、一・二句で使用されていて、三・四句や五・六句ではないのである。つまり、適處は対句でない所でも、このように色彩に富む文字を使用している、と言うことになる。この様な例は、彼の詩の多くの句で見出すことが可能である。この事は、彼が極めて色彩に富んだ感覚に特筆すべき才能を発揮した、と言つてよいであろう。それは恐らく彼の文人画(南画)の影響が詩に反映したものであろう。

そのことは同様に、聴覚的な表現にも多くの例が見いだされる。

驚禽出樹去 驚禽は樹を出でて去り

一顆墜紅珠 一顆 紅珠墜つ

(適處『研志堂詩鈔』卷下 「秋園」)

此の二句には音を表す文字は使用されてはいないが、「驚禽」という言葉で驚いた鳥の羽音を我々に訴え、「墜」という言葉で木から果物が落ちる音を連想させるのである。

渡航客争喚 渡航の客は争つて喚き

村樹鳥連環 村樹に鳥 連環す

(適處『研志堂詩鈔』卷上 「抵城崎温泉」)

此の二句でも「客争喚」の言葉から、渡し場での喧騒が聞こえてくるし、「鳥連環」から夕暮れの時に帰る鳥たちの鳴き声が、詩を詠む者の耳に響くのである。

梨邊風碎雪 梨辺の風は雪を碎き

簷畔滴飛珠 簷畔の滴は珠を飛ばす

(適處『研志堂詩鈔』卷下 「春雨小集、此日有探花約、不果故及」)

この句でも「風碎雪」「滴飛珠」の言葉で、風が雪を碎くほどの音が聞こえるし、雨滴が飛ばされる音まで聞こえてきそうである。このような表現はある言葉からの連想であるが、その連想が音を伴うような句作りを意識的に作詩しているとみてよからうと思われる。

この様な詩の作り方は適處独特のものであって、他の日本の漢詩人にはそれほど多くみられる現象ではない。恐らくここにも適處の詩の

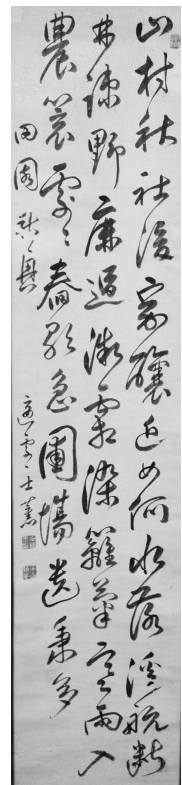
特徴が表れていると見るのが自然であろう。

視覚的な表現と聴覚的な表現とは、漢詩における表現方法の在り方の一つであるが、入谷仙介氏の「王維の詩における音声表現」(『宮沢正順博士古稀記念・東洋—比較文学論集』二〇〇四年)によれば「詩は一般に視覚的表現が主であつて、音声表現は従である。視覚的表現に音声的表現が伴っているか、あるいは専ら視覚的表現のみで構成されているかのいずれかであつて、・・・」と述べられる。その点からいえば、適處の詩は視覚的・聴覚的な表現が実に豊富であることに気づかされるのである。恐らく彼の研ぎ澄まされた感覚からくる結果であらうと思われる。

以上、少数例ながら、彼・適處が唐詩や宋詩から学んだであろう詩の技法は、間違いなく唐詩や宋詩の王道ともいえるスタイルを我がものにして、それを実行して作詩したと言えるように思われるのである。これは、江戸後期の漢詩の主流が、実は宋詩中心であったことから言えば、唐・宋詩という、中国の詩の伝統から見ると、唐詩の気宇壮大、宋詩の繊細さの「両方を兼ね備えた詩の世界」を築いた、と言つても過言ではないであろう。ここにこそ適處の詩の特色が如何なく発揮されている、と見る。そして、その事が江戸末期にあつて彼の詩が多くの賛同を持って迎えられる理由ではなからうか。それらの事はこの『研志堂詩鈔選』を読んだければ、納得されるであろう。

図二は、正牆適處自筆の書幅である。

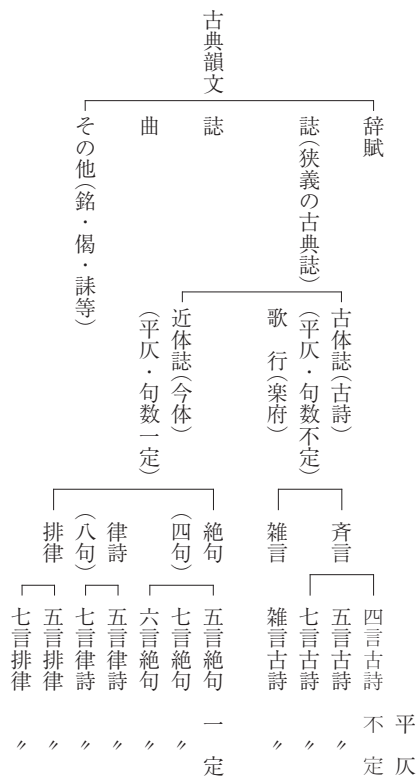
図二 正牆適處自筆書幅「田園秋興」(鳥取大学図書館蔵)



四、『詩鈔』の詩体

では次に『研志堂詩鈔』に録されている詩の分類について見てみようと思う。中国のいわゆる「漢詩」と呼ばれるもの、つまり、狭い意味でいう中国の古典詩には、詩が生み出された長い歴史の中で、さまざまな要素が混入して、そのまま存在していることから、何時しか体系的に分類しようとする動きが起り、唐詩(近体詩)を中心に次のような分類が成立している。一、絶句(五言絶句・七言絶句・六言絶句)、二、律詩(五言律詩・七言律詩)、三、排律(五言排律・七言排律)。これ以外のものは、古詩・樂府等に分類をして、それ以外は雑言として扱っている。つまり、唐詩以後の詩では絶句(五言絶句・七言絶句・六言絶句)か律詩(五言律詩・七言律詩)が中心で、古詩や樂府体のスタイルはごくまれに存在するという現象が一般的なのである。

ここで右の説明をわかりやすくするために、詩のスタイルを分類した一覧表を以下に掲げておこう。なお、この一覧表は『中国詩選三(唐詩)』(現代教養文庫、松浦友久著)から借りたものであるが、一部直してある。



| 詩型 | 上卷 | 下卷 | 合計 |
|------|----|----|-----|
| 五言絶句 | 八 | 十四 | 二二 |
| 五言律詩 | 十 | 六 | 一六 |
| 七言絶句 | 八三 | 四八 | 一三一 |
| 七言律詩 | 二七 | 四一 | 六八 |
| 五言古詩 | 三 | 二 | 五 |
| 七言古詩 | 一 | 二 | 三 |
| 樂府 | 一 | 一 | 二 |
| 六言絶句 | 一 | 〇 | 一 |
| 雜体 | 一 | 一 | 二 |
| 四言 | 一 | 〇 | 一 |

訳注『研志堂詩鈔』選(一)(塩見邦彦)

以上の様な分類から適處の詩を分類すると、以下に示すような表になる。

| 不明 | 〇 | 一 | 一 |
|----|-----|-----|-----|
| 合計 | 一三六 | 一一六 | 二五二 |

(注：不明一は七言六句で従来の分類に入らず)

右の表から言えることは、適處が詩においてよく使用したのは、七言絶句の詩型であり次いで七言律詩であった、とだけは断言できよう。人にはそれぞれ得意とする詩型があり、中国の杜甫では律詩であり、李白では樂府であつたように、自分の作る詩においても得意とする詩型がある程度反映する。その意味でいえば、適處が得意としたのは絶句であり、しかも七言であつたことは何を物語るのであらうか。

絶句という詩型は簡潔さを旨とする詩型である。五言は七言よりも更に簡潔であるが、どちらかと言えば七言の方は文字が多い分、自分の言いたいことが述べられるという特色がある。適處はそこに魅力を感じたのではなからうか。その様に見ると、七言絶句で読まれた詩の多くは送別詩であつたり、地方の名所を詠む詩であつたり、絵画に対する題詩であつたりする。これらの詩は簡潔であると同時に、紙面の制約であつたり、即興であることから、その場で求められることによる所が大きいと思われるが、その様な処に適處は己の才能を發揮したのである。また、七言律詩は先ほどの説明で指摘したように、三・四句と五・六句では対句を用いるという約束事があり、その点で作詩の難易度が他の詩形よりも一段と高いのがこの詩型である。適處はこの難しい詩型の詩を多く作つたということは、他ならぬ漢詩の作詩能力が他の漢詩人たちに比べて格段に優れていたことを証明しているという事であらう。以上の事柄は、これはこれでまた注目してよいことであらう。(なお、『正墻適處』(正墻明著・非売品)に指摘のある『研

志堂遺稿』については稿を改めて述べようと思っっている故、次の機会をお待ちいただきたい。

五、万水千山

彼の詩集『研志堂詩鈔』を繙くと、よくもこれだけ日本各地を旅して、かくも多くの詩を詠んだものと感心させられるが、その詩題に詠まれた地名だけを以下に挙げてみよう。上巻・下巻併わせての地名である。

鹿沼・日光・那須・松島・金華山・栃(折)木・水戸・鎌倉・甲州・寝覚ノ床・霓川・志方(播州)・室津・有馬・摩耶山・舞妓浜・姫路・街川・絵島・奥野銀山・天橋(天の橋立?)・峰山・城崎温泉・村岡・鰐淵寺(雲州)・米城(米子城)・弓ヶ浜・船上山・玉島・笠岡・伊予・道後温泉・今治・興居島・九万山・菅生山・巖屋山・宇和島・八機浜・佐賀・時津(港?)・崎港(長崎港?)・天草・薩摩・諫(早)港・大村・伊万里・武雄・平戸・筑後河・耶馬溪・裨旧村・赤間関・壇浦・錦帯橋・巖島・芳邸温泉・淀江

これらの地名は現在のどの地名であるかも判然としないものもあるが、大きく分けると関東・奥羽から岐阜・兵庫・京都の一部・それに鳥取近辺・あとは瀬戸内・四国・九州の各地である。年譜からも判明するが、藩主の名を受けての九州探索であった可能性もさる事ながら、これだけ広範囲に動いた人物も珍しい。まさに「万水千山」と言ってよいであろう。それぞれの地域の風物を詩に詠み込みながら、

それらの風物に彼自身の姿を投影している所が、彼の彼たる所以である。丁度その地の風物が、その時その時の自画像なのである。その一つを以下に見てみよう。

山村阻霖雨

山村は霖雨に阻まれ

旅恨鬱難開

旅恨 鬱として開き難し

夜話多農務

夜話 農務多く

朝餐半芋魁

朝餐は芋魁を半ばす

風聲寒葉落

風声に寒葉落ち

雲色斷猿哀

雲色は断猿に哀し

此地空留滞

この地空しく留滞し

何時出勿来

何れの時にか勿来を出でん

〔折木山中阻雨〕卷上)

山中で「霖雨」(長雨)に降りこめられ、農家に一夜の宿をお願いした時の模様を詠んだ詩であるが、そこで話題になった「農務」や、「朝食」に出された芋中心の食事、することがない時間を持て余す作者・適處が考へることと言ったら、何時ごろあの勿来の関を越えられるだろうかと云うこと位である、とさみしい胸の内をさらけ出している。恐らく、事実に基づく描写であると思われるが、五・六句で、宿泊した家に吹き付ける風に交じって、秋の落ち葉の音が彼の耳朶を打ち、見上げればどんよりとした雲に交じって、どこからともなく聞こえる野猿の鳴き声に哀愁を感じている適處が浮かび上がる。このような描写は、唐詩も中唐以降の詩や宋詩が得意とした描写であり、とりわけ宋詩が得意とした描写である。これらの表現から、かの南宋の

大詩人・陸游の詩を連想するのは彼にとつては迷惑な事ではないであらう。そこで今、宋代を代表する詩人のひとり陸游の詩から「宋詩的」と思われる典型的な詩を見てみよう。

紅橋梅市 曉山横 紅橋の梅市 曉山横たわり
白塔樊江 春水生 白塔の樊江 春水生ず
花氣襲人 知驟暖 花氣 人を襲いて 驟(にわ)かに暖かなるを
知り

鵲聲穿樹 喜新晴 鵲声 樹を穿ちて 新たに晴るるを喜ぶ
坊場酒賤 貧猶醉 坊場 酒賤(やす)くして 貧も猶お酔い
原野泥深 老亦耕 原野 泥深くして 老も亦た耕す
最喜先期 官賦足 最も喜ぶ 期に先んじて 官賦足り
經年無吏 叩柴荆 經年 吏の柴荆を叩く無きを

(陸游『劔南詩稿』卷五十「村居書喜」)

この詩の意味は以下になる。「朱塗りの橋がかかった梅市の村では明け方の光に照らされて山々が横たわり、白塔の見える樊江の春は水かさが増えている。花の香りが不意に私を襲い急に暖かくなったことに気づかされ、鵲の声は木々の間にこだまして晴れた空を喜んでいのかようだ。街では酒が安く貧乏人でも酔っぱらうほど飲めるし、野辺では泥が深くても老人さえ耕作に従事している。最もうれしいことは期日までに税金を納めて、ここ数年お役人が我が家の粗末な門戸を叩かないことだ」と。なお、この詩は『劔南詩稿校注』(錢仲聯校注、上海古籍出版社、一九八五年刊)によれば、嘉泰二年(一一〇二)の春に作られた詩という。だとすれば陸游七十八才の詩

訳注『研志堂詩鈔』選(一)(塩見邦彦)

ということになり、彼の死の八年前ということになる。

この詩では一句目と二句目の「紅橋」と「白塔」が視覚に訴え、三句目の「花氣襲人」と四句目の「鵲聲穿樹」が嗅覚と聴覚を刺激する。そして何よりも最後の四句で酒の安さや老人の農耕の様子、お役人が税金を取りに來ない安堵感が詠われることで、この詩を明るい農村の一コマとして印象づけられる事であろう。この様な詩の詠い方は陸游独特のものではあるが、広く宋代の詩に共通する詠い方でもある。もう一つ陸游の農村を詠った詩を挙げておこう。

我年近七十 我が年は七十に近く
與世長相忘 世と長く相い忘る
筋力幸可勉 筋力 幸いに勉む可く
扶衰業耕桑 衰を扶(たす)けて耕桑を業とす
身雜老農間 身は老農の間に雜るも
何能避風霜 何ぞ能く風霜を避けんや
夜半起飯牛 夜半 起ちて牛に飯すれば
北斗垂大荒 北斗 大荒に垂る

(『劔南詩稿校注』卷二十三「晚秋農家」八首、其の五)

詩の意味は以下になる。「私の年は七十に近く、世間からは忘れられている。(私の方でも世間を忘れた生活で)しかし、体力はあつて幸いに働くことが出来るし、老衰をおして畑仕事や桑つみの仕事もできる。此の身は老いた農民たちの間に交じっているのだから、どうして風や霜を避けることなどできようか。夜中に牛に餌をやるうと起きると、北斗七星が地平線のかなたに垂れるようにか

九五

かっているのをみた」。前出の錢仲聯氏によれば、この詩は紹熙二年(一一九二)の春に故郷で作った詩ということになるが、陸游六十七歳の時の詩である。この詩では色彩語は使用されていないものの、農民たちと交わる喜びが、声高ではない言葉で詠われていて、この詩を詠むものの胸にじんわりと伝わってくる。これら陸游の二詩から判明するのは、農作業の楽しさと喜びが読む者の胸に迫ることであろう。それは又、適處の詩でも例外ではない。適處の、とりわけ農村を詠った詩では、陸游のような詠いぶりが顕著である。それ程「宋詩」的な表現に満ち満ちているのである。勿論、後半生の詩と考えられる彼の詩は、更にこのような「宋詩的」なものから、「宋詩」そのものと言つてよい程進化を遂げるが、それらの事は、この『詩鈔選』をじっくり読んでいただければ自ずと判明することであろう。

六、凡例

一、テキストは主として『研志堂詩鈔』(大正八年)の復刻版より選
び、版本に掲載されている順序に随い配列した。必要な場合には他の版本も参考にしたが、文字の異同がない限りこのテキスト(大正八年版)に従った。

二、一のテキストは制作順になっていないと思われるが、一応の順と思われるので一のテキストの順に並べてある。また、長編詩については掲載したのもあるが一部省略した。

三、上段に原詩、下段に書き下し文、その後詩の【解題】【大意】を配し、更に【語釈】を配した。【解題】と【大意】はわかりやすい日本語に配慮し、【語釈】は詩の中に出てくる語彙について解説

した。

四、文字については、原詩は旧漢字、書き下し以下は常用漢字を用いた。但し、【語釈】で取り上げた語彙については旧漢字を使用した。なお、詩中の()は適処自身の注である。

『研志堂詩鈔選』の漢詩訳を作成するにあたり、山陰研究センターのメンバーでもある要木純一氏にいくつか指摘を頂いた。紙面をお借りして衷心よりお礼申し上げる。

【訳注本文】

研志堂詩鈔選 卷上

因幡

正墻薫朝華

著

山内衡平作

校

序文

十四五年前。余客土浦。承乏總理郡事。事務倥忽。適因幡正墻君朝華見訪。時屬歉歲。余將出檢傷稼。是以不遑與君款晤。使二三子代接伴。君乃留自畫山水一幅見贈。余深愛其風流瀟洒。以不得盡歡為憾。後去來江戸。十二年於茲矣。傾想其人。時々往來胸中。杳不聞音耗。頃者。土肥子正來。亦因幡人。示詩若干卷。謁余評閱。余乃閱之。正墻君所著。萍游漫草也。悉其漫游中所獲。憑弔古蹟。尋訪遺逸。跋險涉阻。觸懷興感。非泛作者。而才思敏贍。華氣迭宕。使人流連稼住。余十數年來。傾想之而不得聞音耗者。今一旦得之。而又見其有此詩華。譬如失璞者。初求之而弗獲。有人忽持而還之。又瑳琢成美器矣。余躍然喜

甚。且歎曰。詩之不可以已如斯歟。使正墻君不工詩。則余雖傾想之。亦徒以為風流瀟灑之人而已矣。何以知其才思敏贍至此哉。是宜亟激賞而誇揚者。然諸家之評語既備矣。余復何容喙。乃書其卷端。以記余之喜。且以謝其初皮毛視之之過云。歲在戊午秋。書於江戸下谷滿壁滄洲草堂。

弘庵居士藤森大雅識 印(大雅之印) 印(淳風)

(書き下し文)

十四五年前、余(われ)土浦に客たり。之を承けて郡事を総理す。事務は倥忽なり。適たま因幡の正墻君、朝華に訪なわる。時に歎歳に属す。余將(まさ)に出でて傷椽を檢せんとす。是を以つて君と款晤するに違あらず。二三子をして代りて接伴せしむ。君乃ち自画山水一幅を留めて贈らる。余深くその風流瀟洒を愛す。歡を尽くすを得ざるを以つて憾みと爲す。後ち江戸に去來して十二年茲に於いてす。其の人を傾想し、時時胸中に往來するも、杳として音耗を聞かず。頃者(このごろ)土肥子正來る。亦因幡の人なり。詩若干卷を示し、余に謁い評閱せしむ。余乃ち之を閱すれば、正墻君の著わす所の萍游漫草なり。悉く其の漫游中の獲る所なり。古蹟を馮弔し、遺逸を尋訪し、跋險涉阻し、懷に觸れて感を興す泛作者に非ず。而して才思敏贍、華氣迭宕。人をして流(留)連稼住せしむ。余十數年來、傾(このごろ)之を想ひて音耗を聞くを得ざる者なり。今一旦之を得たり。而して又其の此の詩華あるを見たり。譬えば璞を失ないし者のごとく、初め之を求めて獲られず。有るひと忽ち持ちて之を還す。また琢を磋し、美器を成す。余躍然として喜ぶこと甚だし。且つ歎じて曰く「詩の以て已む可からざるは斯くの如きか」と。正墻君をして詩に工みざらしむれ

ば則ち余之を傾想すると雖も亦徒らにおもえらく、風流瀟灑の人なるのみ、と。何を以て其の才思敏贍此に至るを知らんや。是れ宜しく亟(すみやか)に激賞して誇揚する者なるべし。然れども諸家の評語既に備はる。余復た何ぞ容喙せんや。乃ち其の卷端を書きて以つて余の喜びを記せり。且つ其の初め皮毛之を視るの過を謝すと云う。歳は戊午(一八五八)の秋に在り。江戸下谷滿壁滄洲草堂に書す。

弘庵居士藤森大雅識 印(大雅之印) 印(淳風)

(「序文」大意)

十四・五年前、私は土浦に身を寄せていた。郡事を管理する人物が不足しているのを受け、慌しく忙しい有様であった。たまたま鳥取の正墻君・朝華の訪問を受けた。その時は飢饉の年で、私は丁度外に出ている傷んだ穀物を取り調べる役目であった。それで正墻君とは打ち解けて語り合う時さえなかつたのだ。私の代わりに二・三人の人に代わって応対してもらつた。正墻君は自分の描いた山水画一幅を贈呈して下さり、私は深く彼の風流で瀟洒な様子を愛し、歓談できなかつたことを恨みとしたのである。その後、江戸と土浦とを行つたり來たりする事十二年に涉つたが、その間も正墻君を思う心は、何時も胸中に去來するのであつた。その後、杳として音信は途絶えたままであつたが、近頃土肥子正という者がやつて來た。此の人も又鳥取の人で、詩卷若干を示され、私に評閱を依頼されたのである。私はそこでその詩卷を見てみると正墻君の著したもので『萍游漫草』であつた。その詩の全ては彼が諸国を漫遊し作つたもので、古蹟を弔い、散らばり無くなつたものを尋ね、險阻な地を跋渉して、思いに触れて感じたことを詠い、それには作者を思い浮かべるのではなく、才能や考え方は敏捷

でありながら大胆でもあり、華やかな雰囲気が行き来している。それは人に帰るを忘れさせ留まらせるのに十分である。私は十数年この方、彼の詩に傾倒してきたが、その消息を聞くことはなかった。今一度彼の詩を得て、又彼の詩筆があるのを見れば、例えば加工していない宝石を失い、最初、この宝石を求めても得ることが出来ないようなものだ。ある人が持つていてもすぐに返すようなもので、また磨いて美しい器を作るようなものだ。私は躍り上がって自分を責めること甚だしいものがあつた。その上、嘆息して言うに「詩というものは自分もこの様にすべきではないか」と。正墻君が詩に巧みでなければ私は彼に傾倒するとしても、また徒に風流瀟麗の人とするのみである。どうして彼の才能の働きや聡明さを知りてこのような状態になるであろうか。それは彼をほめたたえ誇らしく思うからであろう。しかしながら、諸家の批評は已に備わっている。私は亦何を付け加えることがあろう。そこでこの巻の序文を書いて自分の責を果したのだ。且つ、最初はその表面だけを見ていた欠点をあやまつておきたく思う。歳は一八五八年の秋。江戸下谷満壁滄州学堂にて書く。

弘庵居士 藤森大雅識 印(大雅之印) 印(淳風)

那須與市射扇圖 那須與市の射扇圖

| | | | |
|---------|------|--------|----------|
| 旗幟連營白壓紅 | 旗幟 | 營に連らなり | 白は紅を壓す |
| 霜蹄破浪鍊華驄 | 霜蹄破浪 | 鍊華驄なり | |
| 平軍十萬膽先落 | 平軍十萬 | 膽先 | 先に落(つぶ)れ |
| 紈扇竿頭一箇風 | 紈扇竿頭 | 一箇風 | |

【詩題】 那須与一の射扇図に

【大意】 軍勢を示す旗印がはためき、白色(源氏)が赤色(平家)を圧倒する中、春馬が波を蹴散らし、鎧に身を包んだ騎馬一騎。十万の平家は度肝を抜かれつつ、白い練り絹の扇が竿先に有るのを目掛けて、一本の矢がひゅといふ音と共に放たれる。

【語釈】 ○霜蹄―駿馬のひずめ。駿馬を云う。「馬蹄可以踐霜雪」(『莊子』馬蹄) ○紈扇―白い練絹で作つた扇。「紈扇如圓月」(江淹詩)

鹿沼途上 鹿沼への途上にて

| | | |
|---------|-------------|--------|
| 沿路秋風野草香 | 沿路の秋風 | 野草香り |
| 紛紛涼露濕衣裳 | 紛紛たる涼露 | 衣裳を濕らす |
| 羅針北指三十里 | 羅針は北に三十里を指し | |
| 一髮青山是日光 | 一髮の青山 | 是れ日光 |

【詩題】 鹿沼への途上にて

【大意】 沿道の秋風に野の草は香り、盛んで涼やかな露が我が衣裳を湿らす。磁石は北の方三十里を指し示し、周りを見れば一面の青。ここが日光だ。

【語釈】 ○紛紛―多くあるさま、盛んなさま。「羽旄紛紛」(漢書禮樂志) ○羅針―羅針盤のこと。磁石をさす。○一髮青山―蘇軾の「青山一髮是中原」(澄邁驛通潮閣二首、其の二)を意識するか。

蓑村藤房公章庵舊趾 蓑村藤房公章庵の舊趾

鹽梅調味失阿衡 塩梅の調味 阿衡を失い

遂使神京寶鼎輕 遂に神京の宝鼎をして軽からしむ

脱却簪纓換蘿薜 簪纓を脱却し蘿薜に換え

一庵風月有餘清 一庵の風月 余清あり

【詩題】 蓑村藤房公の草庵の旧跡

【大意】 味を調える塩や梅のように、その宰相を失えば、結局、あの都の帝に他の勢力をそれ程とも思えさせぬようにさせてしまうものなのだ。冠の紐を絹から蓬に変えるような事から早く抜け出すべきであり、庵から見る風や月は、それだけで余情がある。

【語釈】 ○蓑村藤房公―建武の中興の功臣の名。○塩梅―按配とも言う。塩味と酸味。転じて臣下が君主を支えて政務をうまく処理する事を指す。○神京―帝のいる都の事。○寶鼎―所謂「鼎の軽重を問う」こと（『左傳』宣公三年）。○簪―こうがい。冠を止めるため髪に挿す。

日光中禪寺 日光中禪寺

老楓秋寂寂 老楓 秋 寂寂

古槐晝冥冥 古槐 晝 冥冥

石着苔衣濕 石は苔衣を着けて湿り

山懸瀑布靈 山は瀑布を懸けて靈たり

危巖多失脚 危巖は多くは脚を失い

竒鳥數驚聽 危鳥は数しば聴を驚かす

鬢髮雲峰上 鬢髮は雲峰の上（日光山一名鬢髮、日光山は一名鬢髮

なり）

湖光千頃青 湖光 千頃の青

【詩題】 日光の中禪寺にて

【大意】 古い楓の樹が秋に静かに生え、古槐の木の麓は昼でも暗い。石は苔むして湿り、遙か向こうの山には瀑布が懸っている。危なかしい岩は支えも覚束なく、珍しい鳥の鳴き声にしばしば驚く。日光山は雲の峰に抜きん出て（日光山は別名鬢髮という）、麓の広い湖面は一面の青。

【語釈】 ○寂寂―さみしく静かなさま「小院回廊春寂寂」（杜甫詩）。○冥冥―暗いさま。「梨花枝外雨冥冥」（楊維禎詩）。○鬢髮―注にもあるように「日光山」のこと。○千頃―「頃」は面積が百畝のこと。千頃で広いことを言う。

過那須野 那須の野を過ぐ

曠原十里滿鞋泥 曠原 十里 滿鞋の泥

秋草連空一望迷 秋草は空に連なりて 一望して迷う

昨雨未晴雲氣黑 昨雨いまだ晴れず 雲氣黒く

殺生石畔野狐啼 殺生石畔に野狐啼く

【詩題】 那須の野を過ぎて

【大意】 広野は十里も続き草鞋を満たす泥。秋の草は地平線まで見渡す限りで、どの方向かもわからない。昨夜の雨がまだ晴れず雲は黒く、

わが身のおかれたひどい境遇を考えると、殺生石のあたりで野狐が啼く。

【語釈】○曠原―曠野に同じ。○滿鞋―草鞋を満たす ○殺生石―那須溶岩の形勝の一つ。

松島 松島

宇寰三勝想松洲 宇寰 三勝 松洲を想う

今日何縁試一眸 今日何の縁か一眸を試みる

舍邇取遐堪自笑 邇を捨て遐を取りて 自ら笑ふに堪えたり

天橋巖島未曾遊 天橋 巖島 いまだ曾って遊ばず

【詩題】松島にて

【大意】天下の中でも日本三景の一つ松島のことを考える。今日ほどの様な巡り合わせで見ることができたのであろう。近くの景勝を捨てて遠くの松島を見るとは自然と笑みがこぼれる。天橋立や巖島にはまだ遊山したことが無いのに。

【語釈】○宇寰―「寰宇」とも。天地四方の広い世界。天下。○邇―近い。近く。○遐―遠い。遠く。

登金華山 金華山に登る

捨舟千仞向空攀 舟を捨て 千仞 空に向って攀る

一朵金華碧浪間 一朵の金華 碧浪の間

回顧中原小於掌 回顧す 中原は掌よりも小なるを

抉眸遙瞰蝦夷山 眸を抉して遙かに瞰る 蝦夷の山

【詩題】金華山に登って

【大意】舟から上がって千尋の高さまで登る様は、まるで天空に登るかのよう。一本の金の華が、青い波間に漂っているかのようだ。若い頃を思い返せば、嘗て遊んだ中原(江戸)は掌よりも小さく感ぜられる。目を遙か蝦夷の山々の方に向けて見てみる。

【語釈】○一朵金華―金華山を一本の華に譬え海から咲いている感覚で眺めている。○回顧―若い頃に思いを巡らすこと。回想。追想。

折木山中阻雨 折木山中にて雨に阻まる

山村阻霖雨 山村は霖雨に阻まれ

旅恨鬱難開 旅恨 鬱として開き難し

夜話多農務 夜話 農務多く

朝餐半芋魁 朝餐は芋魁を半ばす

風聲寒葉落 風聲に寒葉落ち

雲色斷猿哀 雲色は斷猿に哀し

此地空留滯 此の地空しく留滯し

何時出勿來 何れの時にか勿來を出ん

【詩題】折木山中で雨に阻まれての詩

【大意】山里で長雨に阻まれ、旅の思いは鬱鬱として晴れない。宿の親父の夜話は農事が多く、朝飯は芋がほとんど。風の吹くたびに木の葉がほろほろと落ち、雲の色は暗く、時折聞こえる野猿の鳴き声。す

る術もなく留まっではいるが、一体何時になれば勿来の関を越えられるだろうか。

【語釈】○折木山―宮城県栗原郡高清水町にある山か。○霖雨―三日以上降り続く雨。長雨。「淫、霖也。雨三日以上爲霖」(『禮記』月令淫雨注)。○留滞―同じ所に留まること。○勿来―福島県いわき市の地域名。勿来の関は奈良時代以来の関所。白河・念珠(ねず)と共に奥州三関の一つ。

重陽前一日水戸客舎作

重陽の前一日水戸の客舎にて作る

重陽時節雨濛濛 重陽の時節 雨濛濛
孤客燈前鬢欲蓬 孤客 灯前 鬢蓬ならんとす
明日家園無主菊 明日 家園の主無き菊
東籬寂寞怨秋風 東籬 寂寞として 秋風を怨まん

【詩題】重陽の節句の前日に水戸の旅館での作

【大意】重陽(陰曆九月九日)の頃は雨で薄暗く、一人の私は灯の前で鬢が伸び放題である。明日は重陽の節句だというのに、故郷の庭には主人のいない菊があり、旅先の私は陶淵明のように東籬のほとりで見しく、秋風を恨めしく思っている。

【語釈】○重陽―旧曆の九月九日。中国ではこの日、菊花酒を飲む習慣があった。○濛々―霧や雨などで薄暗い様。○寂寞―しんとしてさみしい様。

鎌倉懐古 鎌倉懐古

霸業 廖廖滑水涯 霸業 廖廖たり 滑水の涯
咸陽一炬舊繁華 咸陽の一炬 旧繁華
鶴陵欲認當年跡 鶴陵認めんと欲す 当年の跡
無限松風噪暮鴉 無限の松風 暮鴉噪ぐ

【詩題】鎌倉懐古

【大意】頼朝の霸業も、今となっては空虚な夢と終わったが、滑川の流れるようなもので、かの咸陽が焼かれたのと同じ運命であった。鶴ヶ丘に昔の痕跡を探しても、今は松風が無情に吹き、夕暮れの鴉が泣き騒いでいるだけである。

【語釈】○廖廖―空虚なさま。「青天高廖廖」(韓愈詩) ○滑水―滑川。鎌倉の河川の一つ。○鶴陵―鶴丘八幡宮の一带。○當年―その当時。昔。

甲州猿橋 甲州の猿橋

雲埋老樹雲容變 雲は老樹を埋め 雲容は変じ
水拍危巖水勢驕 水は危巖を拍ちて 水勢 驕る
誰識行人斷腸恨 誰か識らん 行人断腸の恨み
一蓑寒雨渡猿橋 一蓑 寒雨 猿橋を渡るを

【詩題】甲州の猿橋で

【大意】雲は老樹を隠したかと思うと、変容を繰り返し、水は奇岩に

打ちつけ水勢を誇るがごとくである。旅をする私のこの断腸の思いを、誰が判るであろうか。蓑をつけ寒々とした雨の中を一人猿橋を渡る気持ちが。

【語釈】○断腸―胸が張り裂ける。悲痛さの形用。「空断腸兮思悱悱」(蔡琰「胡笳歌」)。○猿橋―山梨県大月市を流れる桂川に架けられた橋。

甲府途上 甲府途上にて

筠籠紫菓水晶光 筠籠 紫菓 水晶の光

亦見甘酸生計忙 亦た見る 甘酸 生計に忙し

暫著遨遊汗漫客 暫らく遨遊汗漫の客に着して

葡萄架下領秋涼 葡萄の架下 秋涼を領せしむ

【詩題】甲州への途上にて

【大意】竹の籠に紫の果物(葡萄)が水晶のような光を放ち、楽しみと苦しみの生活はどこも忙しい。しばらく遊びに取りつかれたはるかな旅人に、葡萄の棚のしたで秋の涼しさを独り占めさせている。

【語釈】○筠―竹、竹の青い皮。○甘酸―甘苦に同じ。苦楽。「逖與將士同甘苦」(十八史略 東晋、中宗)。○生計―生活のこと。唐・宋以来の口語 ○遨遊―遊ぶこと。「挾飛仙遨遊」(蘇軾 赤壁賦)。○汗漫―はるかに広いさま。

寢覚床(浦島太郎垂釣處、在木蘇(曾)山中)

寢覚の床(浦島太郎垂釣の處、木蘇山中に在り)

龍宮鴛夢覺還香 龍宮の鴛夢 覚むるも還た香る

玉筍携歸滿鬢霜 玉筍携え歸る 滿鬢の霜

回看佗年歛樂地 回り看る 佗年 歛樂の地

潭雲空護仙人床 潭雲 空しく護る 仙人の床

【詩題】寢覚めの床(浦島太郎が釣り糸を垂れたという所で、木曾山中にある)

【大意】龍宮での夢のような宴会は、目が覚めても香り立つようで、玉手箱を持って帰った時には鬢の色も白く変わっていた。かえり見れば嘗ての歛樂の土地。しかし、眼前の寢覚ノ床は深い雲が仙人の床を守っているだけだ。

【語釈】○寢覚床―長野県木曾郡上松町にある木曾川の峡谷。浦島太郎が魚釣りをした言う伝説がある。○玉筍―玉手箱のこと。

麿川晚歸 麿川にて晚く帰る

醉脚蹣跚歸去遲 醉脚 蹣跚 歸去遅し

横塘十里一筇枝 横塘十里 一筇の枝

蒼茫夜色黄成白 蒼茫 夜色 黄 白と成り

野菜花田月出時 野菜の花田 月の出づる時

【詩題】麿川で夜遅く帰って

【大意】酒に酔って脚はおぼつかなく晚い帰宅。川の傍に在る堤を杖を頼りに十里もの行程。青く広々とした夜色が黄色から白色に変わる時、月が出て一面の野菜の花を照らし始めた。

【語釈】○麿川―兵庫県の加古川。麿水とも言う。○躡躡―ちどり足のさま。唐・宋以来の口語。「兩足幾躡躡」（蘇軾詩）。○蒼茫―青く広々としたさま。

〔付記〕

本稿は、

科研費 基盤研究（C）研究課題／領域番号19K00296

近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置―若槻克堂と

剪淞吟社の学際的研究（期間 二〇一九―二〇二一年度 研究代

表者 要木純一）

及び、

島根大学法文学部山陰研究センター山陰研究共同プロジェクト

近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置―若槻克堂と

剪淞吟社の学際的研究（課題番号 一九一三 期間 二〇一九―

二〇二一年度 研究代表者 要木純一）

による成果の一部である。

Kenshido's Selected Poems (1)

Kunihiko Shiomi

(Professor Emeritus, Tottori University, Former Professor, Shimane University)

[Abstract]

Tekisyo Shogaki (1818~1875) was a poet who lived through the last fifty years of Edo era and early Meiji era. His Poems were published in Bunkyo 3 year (1861). Kenshido poems has the characteristics of regional poetry and also characteristics of the late Edo era.

Keywords: Tekisho Syogaki, latter term of Edo era, poem,